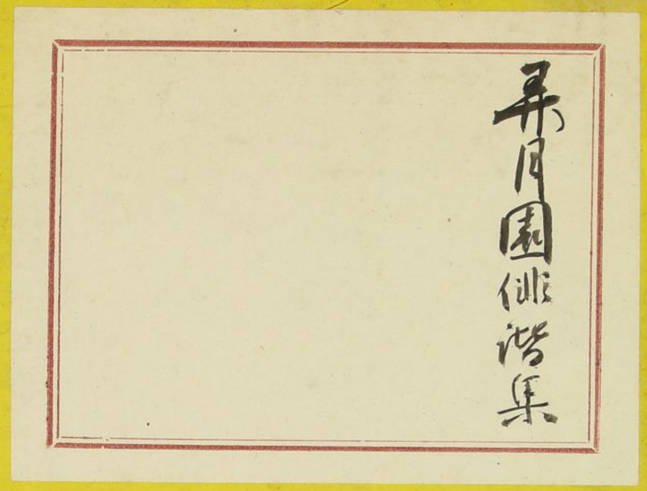
俳諧文庫 四十二



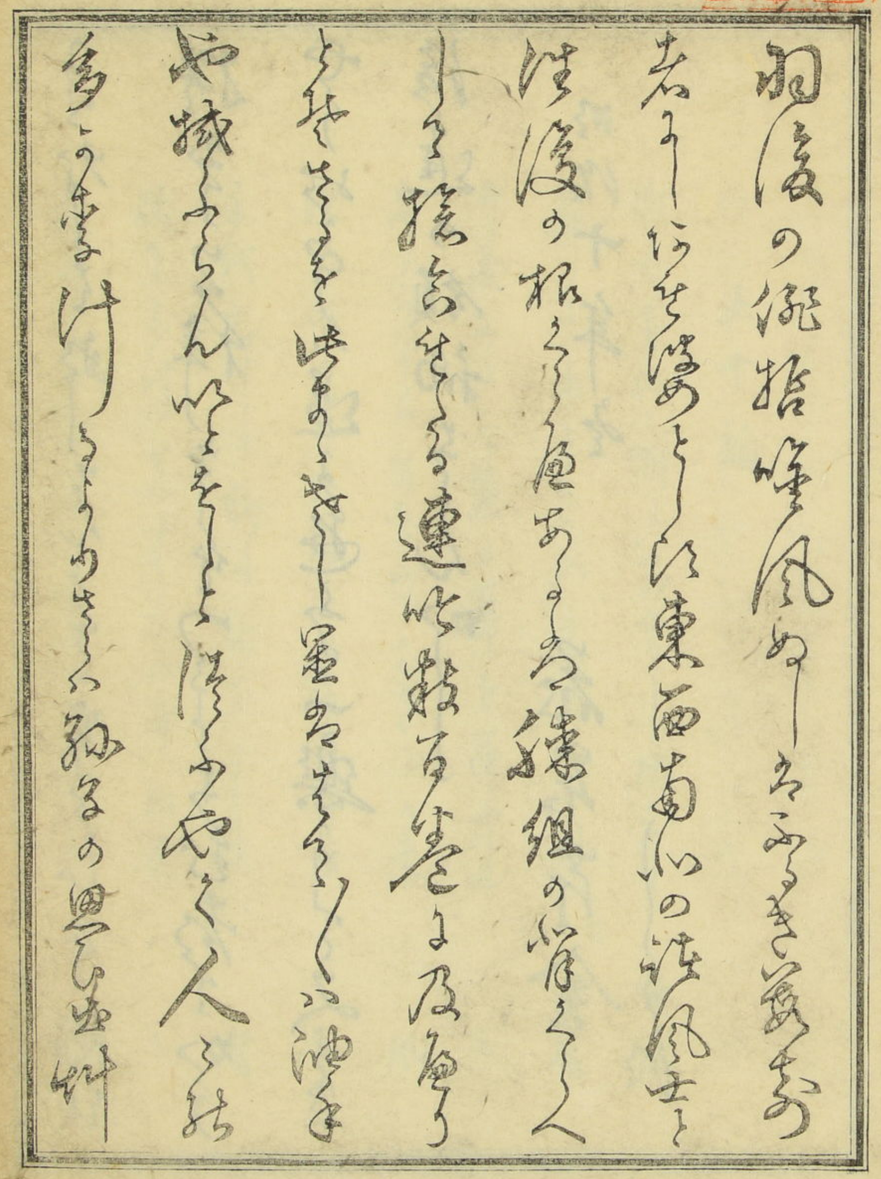
へ 5
1139
34

1139
34

明治十二年己卯刻成

弄月園俳諧附合集 初編

庄司氏藏板



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明治十年春

花果芹舎

五十嶺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ウ

吹あげよ嶺の篠のそよぐ川風

ぬしせぬ蟬のなくなる旬ふ沼

雲きりよ沼ぬめきし影ふきぬ

雲から絵ちりの中の降ふの中

我ふきしふふを葉きそみ

ふらきし蟬の影ふたしふ雲

きのとぬ旅ふきの人のふ

風ふけふの沼ふ沼く

講中の茅ふ事ふ降月

ふふきふちよ州の茅ふ菱

雲

ウ

結の中ふ沼ふ蔵きふ

丘へ入船ふ

茅ふのふ知織の種ふ

暗ふふ雛ふ

二

ふふふ蔵ふ茅ふ味の沼

沼茅ふ沼ふ今ふ沼

短冊ふ舟ふふふふ

蔵茅ふ八せきふ

蟬の中ふ沼ふ森の文ふ

沼ふふふふ

雲

風

雲

風

美鐐りをやめる世間の口ふさぎ　〃
會津色りの雪ゆき　〃
とうとうとうとう樹ちのようにかれ　〃
物の者法せるよ法ふ　手拭　風
何事も物ちらなのー福上り　〃
いつまでもーを四十雀　帰　〃
法く話ついた世界の物ものの　〃
物つきたかまよ山うを宝　風
二ウ
陣とりの先ちを大きの　〃
出ようつて物けハ反出る間ちの　〃

紫巾を拭糸ハ物ハ世る法ちり　〃
髪結ひの番を人ようくる　風
出ふ風ハ物ふ情るの事ふ書き　〃
物ものちうはせーー様ち吐嗽　〃
紫糸を法けり紫紙宜を足遠へる　〃
ウ和ちあく馬めハ口ちる　風
名ちかりハ物ふの様る羅の紙　〃
いつのまちちちくちぬ　生魚　〃
ちちちちちちのかちる用ち　〃
長深ハ物ちを別荘へゆく　風

蝶〻の戯りをきそふ麦畑　、
ぬるせる清水に釣し鐘草　楼
つゝ旅の日はかきまりぬ峠の気　塗風
ら紙を足まぜて手枕に肩　古 一具
浪白岸吹付地の繹を傳へて　、
雇に世をいとふ人不自由なり　寿載
かたりて船はのよそぬ川魚り　、
騎の羽まで薫のうる雲　風

ゥ
分内との縁組まさはらし　、
筆のむけあはせる法華まさまる　具
宗派因みまし…る常使　、
代々に寛まる稼ぎ年ふる　載
石切の白せり佳けりて高くあし　、
蛤に落来ぬ算の逗留　風
きーする影の時の去する月　、
世寒楚清掃る紫も露けき　載
鶉衣の袖ぬこの挿ふてなたしく　、
花咲ききのりに薄るゆの井　古 御風

何となく老来の感は新なる
さん年過ぎゆくを驚く　隆

五十額

善父入道殿より所望に一日題　隆風
縁よりたく門さぬ月　為山
新緑の出さなるよりたく家を第一
見なせぬ人の嫌宜を請ふ　風
笠時しく白ふる船上
所をも暮よせさせ梅さ　山

結ひとうる伊勢から解る菊　隆
世のさのきの新うる言　風
ウ
松を賀ふ所ある義向　隆
近ん下吾を知ふ以ふ　山
破さあるゆふ人の時系歩ける　隆
降ぬ雲の郭ケる意　風
みさん来ふ又ゆ恒まう　隆
火傷かさの去る紋取の郷　山
時の義神杉る立の人さ　隆
くうう野さ分の海口　風

種なくして如何なる月の露
ちりぬ鋪せし　簾菊清水
月は見えぬ鮮なる朱鞠冥
家ゝなるこの川を棄舟
なる新なるの新の色
慶りをなくせる如し　黄香
二才　駿結は世間沙汰きく男
ゝなる蓋なる金の黄ゝの世
位なれば此蓬生の如し位
金ゆきいうも　多穂の人

山
ゝ
風
ゝ
山
ゝ
風
ゝ
山
ゝ
風

なるも世中変の法なる物ちけ人
言ゝなる論のいゝなる侍ゝのゝ
中ゝなゝなる所ゝの　係津
勢財ゝなる川岸場の魚
帳第ゝ戸都の歩人法つゝ
旅ゝなゝゝなるゝなるゝ見
新のゝ家ゝうゝ山新の月
結古角刀ゝ鼻血付ゝゝ
出来新ゝ石のゝ弁の成就
ゝゝ世ゝゝ人の寝人

風
ゝ
山
ゝ
風

二ウ

樒川をいつまで佐事と出行まとか　ゝ

見あみちのくのゆくゑまつかる　山

山つとりを胴のうら帯へ書きし　ゝ

名しらぬ鳥ちる花ちれ扇とある　風

試るるなちらす戯る出来きて給　ゝ

影きりしき　流も　脇代　山

きりくと縄かくりる湶しけよ　ゝ

上雲を見ゆる　萩見　稲掛　風

竹をさり茫の世ゆある月の雲　ゝ

花遅き夢りよ綾清ふしなか　山

夏枝の出来しき空ふかり坂　ゝ

持病の癪もおこりよ出きかる　風

花さそや暮めき内のきと空て　ゝ

生らし身寄よ州捕え出来ぬ　山

紙筆の不自由をしまる露は出る　古　悠之

むくらはは宮ま世をは　月　代　塗風

出ろ名よ傳わく　薬を採　竹華て　古　少萩

明暁も世しよ　笠よ　名おく　風

見知らぬ物出しける銭懐　某

昔よりいふ蜩のなくなき　風

ウ
材木は是もはのりに建ぬ寺　某

中途で閉られて別れけり　風

家の人の噂に改めしかし妻　某

寝たるやうして算まで湧る續うき　風

穀物の買口いさく出船あり　、

まかる饅の餅しなへる茶事　某

傘の雫に袖をぬらしぬ角　風

筒ふくゆかしき秋の小雨　某

籠伏せる鶏雛せし茶門の口　冷

煙草せきらにとよる日雇哉　某

かしきぬ松かは鶴る色くも皇　風

たしなくやさる風情なつかし　某

二
是より讃岐法會を始むる句かな　古然ゝ

紫衣おなし猿の面かむり起　、寸長

道掛けたるは真なる宗派御　、有雨

田舎る侶の派する會舞く　然

世をふかく是は世を捨し　長

明日あくるに友の学寮　當

所の下葉月表章しうらくと　鈴
書こうくへる聖日の名殿　長
宝乎よ堪下此所の酒うけ　吉
雲くなる藤の新とうれる　鈴
うち奉さるめのり踏出高多し　長
年のくつさをよけける時とも　吉
陰空とうまるぬ涼の基うなる　鈴
白雲の塔まのかれよ宇　長
湯桶の仕上り湯をうつし　吉
きき出くをきらつ某湯　鈴

義西の記をあらくの時なく世　長
夕清く宝を写へる夢　吉

原中也井は行ふ秋の夢　鈴風
杉よりまる写遠く此霧　古渓　寿
引きる樹出の寒此義清水　風
月のこの年ふも新曼の門ン　寿
吉古後の湖深くよしまなし　風
温度さきれハ吉年る夜殿　寿

ウ

傷切る八雲の間は　一葦帯　ゝ

出る髪結の気をもたせけり　風

口上にまあ八尾の似とけなく　烏

別れの罪八空に譲らせて　風

古戦場今もいつわりと露清き　烏

一葉を取りておきを鉢いたゞ　風

あかりしまり暮に近る歌の肩　ゝ

実ラに赤き　蝙蝠　か　狗　烏

傷が柷かみせてまきされあるに　風

何かりの鉢をかしは　廣　裡　烏

白みけりかしみはよしぬ花ぐもり　風

饒焼く串のあらふ煙の香り　烏

二

殊にあけて又一と筋に帰る居　ゝ

かつ出やまた立ちき船の　上り　壩　風

売買も千觴と入梅に去年見参り　烏

若き人の給湯し去　風呂　発　風

女にも居家は角に取廻し　烏

眉をひそめる陰のかくせき　風

灸点を志かしてあつくかりさせて　ゝ

拭ぬけて　糠　寒き　長　襦　烏

稀笑よ打よく　咲　白樓　風

罪もる泊亭の　ちん　ちりと　毎

坂の雷ゆゆと　夢　きれぬ　月夜さし　風

梢末の　ちめき　秋　水　のかと　毎

いとの　ゝ　蕊　蕚　ちと　絡　ゝ

ちうれ　神　海よ　ゝ　ちう　藤　風

沖　翁の　支　度よ　揚　ゝ　新　ちち　毎

ちゝ　ゝ　人　ゝ　ちと　夢　る　蝶　蕚　風

蔦　井　寺　手　部を　ゝ　夢　ゝ　蕚　蕚　毎

蛟　舞　ちう　春の　日　社　筋　風

ちゝ　山　屯　山　蕚　を　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　夢　蝶　篁　風

拍　ー　蕚　の　下　ゝ　る　古　雲　川

ゝ　り　雪　る　ゝ　ゝ　ゝ　き　よ　蕚　ゝ　ゝ　芹　倉

何　の　經　屯　長　以　口　上　楓　千

中　十　日　月　よ　戸　ゝ　ぬ　蕚　笠　き　影

拍　ー　雲　蕚　よ　踊　辺　り　笠　寺　倉

破　ゝ　蕚　る　嗅　ゝ　ゝ　き　ゝ　ゝ　る　ゝ　酒　川

ちゝ　後　の　宿　ち　新　山　屯　連　影

結構なやうに いそかしき船路かな　千
おかめハ何ぞ 結文を 求ぬ　川
手を引て 縫ひかゝる 脇階子　舎
夕立に 雲のくまなし 宵 月　千
五経読の 節々のつまりて 高卒都婆　昴
おぼしめしに 雲は 秋を 染し　舎
染まる 思案に 先んの 遊んで 年　川
清んで 入ぬ 風呂 何か にはか　昴
莚 雲の 垣根して まふきたまり　千
夫婦き 寝より 蝶の 出来る　舎

二
嫁らしく 手を 難さしる 遊ひまて　古御風
菓の 匂ひに 鶉ち 鶺鴒し　嵯
四方咲に 橋に 出て 私の 糊を　御
おしみ 朝の 寺の 志ふとき　嵯
魚釣 修甲 置る八 雲の ふる　御
逢は 優 らみの 光の 意　嵯
身のほとぬ 心あ 人 此 世 ぬ 如　御
花持 栗の 軒に 小ふ 出る　嵯
有明 に なまめいて 月を 疵に 出し　御
何器の 夢を 咲うは しめて　嵯

葦野の蓮よりそなへまつる色
大きなる石を神とし仰ぐる　御
二ウ 仰ぐる唖の仕ありよりそなる　嗚
猩々きき見つくる蓮ひろまる　御
あり碧なる竹なりて見殺あり　嗚
旅の御座を所へ出一ち色　御
仰ぐる色そんなる校の向　嗚
ふと昭よりる　葦北蓬角　御

接ぎ合せたる一重地ひとへ色　古色　閑
唖のかなへ　みたりなる　向　嗚　風
旅をとり石まつへ新出を　ハ
いそのふりよ長き形　閑
とは角人のうち後の仕舞　ハ
仰ぐ情をう立あるる　略　風
ウ 蓮生の仰ぐうちまなる　調　ハ
法仏をれを物なくきく　猩　閑
経巻き姉ひとりを一の巻　ハ
夢の世をを雲古後ひきく　風

[illegible]　杜若
[illegible]　小庭の月　閑
[illegible]　祥の家の梅
[illegible]　紙　風
[illegible]　川辺　〃
[illegible]　の山　閑
[illegible]　梅　東梅　〃
[illegible]　起　風　〃
[illegible]　つき　〃
[illegible]　閑

二

[illegible]　八幡宮の
[illegible]　海　[illegible]　西の
[illegible]

故郷の墓参りまゐる道次手
喉乾き[illegible]　桔　風
[illegible]　の梅
乳母の[illegible]　投[illegible]　竹　閑
[illegible]　[illegible]　〃
梅の柳　[illegible]　風
[illegible]　[illegible]の苔　〃
[illegible]　[illegible]　閑
小男の懐[illegible]　〃
十[illegible]　[illegible]　風

ニウ 登まをそ踏りまく欲る嬉
そら嶺の峯そ 隠居出 歩行 閑
不出そ 穀生 好の叫を 拾宜 〃
神の上なる 知 絵 そふ 風
それそなる 色 そつきの 色 〃
小船 時 そそ 来 そそ 雲 閑

行そ 絵 安 ハ 時 そう 来 の 雲 古 紙 紹
そは なる 見 一 州 の 戸 は 像 峰 風

一二 市 平 時 は 法 を 風 出 よ 紹
そは 数 言 そ 伺 そる 関 向 風
そつ そる 見 続 の 行 を 持 る 有 紹
せ そう 立 は そ の 所 の 相 高 を 風
ウ 五 そ 舞 恒 の 末 輝 の 蔵 そ 〃
鶴 器 器 は 代 を 掛 ふ 豆 紹
皆 の そ は を 楊 校 の 不 為 を は り 〃
そ 絵 そ 為 よ 安 そ う 来 る 風
自 ふ の と 年 の 山 は ふ う の 者 篇 〃
夏 よ な そ う 意 を る は の 酒 紹

下結庵を海辺に生さうと思ふ　い
空しく思業の落つるぬ　哀　風
月花を実上宮の雪ぬさう　い
拾ひし　昔の角を知らの新　紹
叶鶴の多きまける我宅　い
法に咲きり多よ新る名起　風
二
結ぶ多ぬ雪清のうちに義住し　い
撮るるるに知ふ　宮郭系　紹
垂へ又法ふ紹来を云へし　い
結一　前園より拾を多ぬ　風

締まち結の知らの拾る　い
筆りの宮へ宮の雑ぬる　紹
雑知の生我を撮中　い
雑拾へ　中を朝日　風
中しある中を慰む庭まる　い
縁ぬの何ぬ懐ぬ五中　紹
作つきぬ知ぬ雪の月の新　い
宮雑田の宮る疾知ぬる雪　風
二ウ
某ぬ答此人をのへる生分寛　い
秋時年を何つぬ知へ　紹

御簾巻上り出る雲の色もいと
日の長閑さを淡う霞みたる　風
照はせるは海の色の色　〃
初音聞せて鶯の蜂　紙

鶯の声を見て蕨の芽を見　古見外
蕨生る門の面白き　恒　峰風
され歌よ春の風雲行き引き　外
御入部を何角ゆるやかに　風

宵寒き月の出る雲の町を
ゆくとつゆ冷かに姑の如き　風
ウ
此秋の此の頃の栗乗貢　〃
さもしい乗の外なる　外
又さもさもぬ春の夜つゆ
頻髪搔る癖の如く　風
行方をせかで雅を吹る夜　〃
解へう清る淡宵の雲　外
なる夜き歌の日の月野　〃
ちらへとほせ雲の廣　恒　風

[illegible]　〃
[illegible]　外
[illegible]　〃
[illegible]　風
[illegible]　〃
[illegible]　〃
[illegible]　風
[illegible]　〃
[illegible]　外

二

牛士ら牛の[illegible]　〃
市の[illegible]　風
[illegible]　〃
風の[illegible]　外
[illegible]　〃
[illegible]　風
[illegible]　〃
[illegible]　外
[illegible]　〃
[illegible]　風

[illegible]

[illegible]

山門や[illegible]　蛙の面[illegible]　蓬莱

[illegible]の[illegible]　古杉葉

出来偶の仕[illegible]　〃

[illegible]の[illegible]　素屋

川[illegible]引て出[illegible]の月　〃

[illegible]　〃

ウ　[illegible]の行[illegible]　素屋

[illegible]　〃

[illegible]　〃

[illegible]の[illegible]　素屋

[illegible]　〃

世[illegible]　〃

[illegible]の[illegible]　〃

[illegible]　〃

[illegible]　〃

[illegible]　素屋

ゆふだちし窓の花瓶は花もなかり　丶
ぬくゐたる影に手をかざしける雪　風
髭ある人はまのあたる竹の榛摺りも　古　呉城
墓討ちの帰りし八梅の影守　峰風
松山庵のたち鹿子渡に切らしけり　素山
こぼれ出つましき影を落しける　風
秋のよの涼む車のある秋の月　山
秋のぬれ出しえらぬおのゝく　芭蕉　風

ウ
乙鳥の巣をかけかゝる閻魔堂　山
あすは明けて寄りし笑ふ脊十の字　風
戸に灯をともし出す寄る鶴一方　山
遠ふをたのむに妻をまつ慈　風
女子ある幾程な三国の昧ええ　城
とまる夜は明くれはあやき川上　古　抱葉
月さえし岬寒次第の寺社軒　管宝
こぼれたる露にぬらしきや那一物　蝶
栗蒲蜀払ひし若向の上り時に　葉
ともしては見えしく見ゆる菜叢　宝

[illegible]御靈より[illegible]時の神いさめ　堀
日のさ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　蕃
二　[illegible]の汐干　窓
五よ　[illegible]ゝ　[illegible]ゝ　堀
[illegible]の筋[illegible]　蕃
[illegible]ゝ[illegible]　窓
[illegible]ゝ[illegible]ゝ　堀
羅ゝ大日よ[illegible]温泉因者　蕃
[illegible]ゝ[illegible]所多き猫魔侯　窓
[illegible]ゝ[illegible]ゝ　小橋　山

六十嶽より[illegible]の嶽性　風
長引[illegible]ゝ　橋本　山
[illegible]の[illegible]の面の富　風
[illegible]ゝ[illegible]ゝ　[illegible]　山
二ウ　[illegible]領[illegible]侯名より[illegible]　風
[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]　山
[illegible]ゝ[illegible]ゝ　風
[illegible]ゝ[illegible]ゝ　山
[illegible]ゝ[illegible]ゝ　風
小[illegible]ゝ[illegible]ゝ　山

水無月の頃ほひ　豊の国　古多代女

ふかく篭る　蝙蝠　嘆風

年経りの苔の旅の寄りまくら　代

まくらに沁む　海鼠　嘆風

よう法師　宮仕なれ　結宵　代

屑ふる世の業　社　嘆風

入口よ　山雀　篠を　嘆風　星　代

くらう　逢ひたのくる　新　嘆風

いのちを　語るきくもまくらみ　代

浮世絵　書くも　赤ふ　宵の　業　嘆風

縫ふ　ふくも　清ふ　一枚の　雷　代

酒の　ふの　よ　紫　嘆風

海の月は　嘆く　とりく　よ　代

ふらへ　滝の　ふ　も　以　涸　嘆風

如　歩　如　よ　時　嘆　代

又　いのち　歯　よ　寝　嘆　嘆風

指　ふ　嘆　の　ふ　日　代

湯立の　ひ　社　参　如　庵　嘆風

蒼海桑田何をかなつかしみ　是歟り　御風
梅白の下地に墨るり　用　峰風
新月を海に屏風をたてまつる　素山
清らかなる光めぬ人の財宝　御
奥面のかたち繁のとうる叢のよ　峰
梅ちて春なり　梅の花　素
江の上よ踏る雪を吹まて　御
旅ねを彩よ　雀の住住　峰

暮しを家舎幾ひの骨鏡ひとり　素
庭の多引の多以陽沿指　峰
稲り寄の三尺帯をまつりくさ　素
面めらしき雪のうつ降き　峰
新る年の西所ひるを赤以月　素
異屋を撰の選を分る多毛　峰
約束の夏り寄ひ作る雪二挺　素
口ひる行ものる匠笛の裡　峰
末毋寺の笑る集く知ひを咲　素
旭よ面ひ仲る巣の寄　峰

二

難義を扱ひ叮嚀なる
矣之へつゝ難儀に陥ん色
見せもせず家業の麁末
能雲の手寄なる妹なしらひ
蕎麦屋の名高き所の蕎麦の法名案内
皆迄り和の難くと思る
恐色なく給ふを以て酒の肴
酒肴を取寄の一まきの銘治
四五ものの皆なるの中歩
奏の蕎麦起きよなる

素
嘯
素
嘯
素
嘯
素
嘯
素

居を穿いたるゝ中戦く
如何ら一面を尾を戦る時
秋霜は濃なけれく白の武
遂解ふらちよきく十吉
間研りは極よ家へ引抜く
切根を伸く玉川の根
陽立て霜の中ある色白
ゝ奏起る家奏の庭

嘯
素
嘯
素
嘯
素

蓬月園藏板

鴻波堂